

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月22日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720284

研究課題名（和文）ワイマル期ベルリンにおける政治的街頭闘争の展開に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study on development of the street fights in Berlin during the Weimar Republic

研究代表者

原田 昌博（HARADA MASAHIRO）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：60320032

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ワイマル期ベルリンの街頭（特に労働者地区）で様々な政治勢力（ナチス、鉄兜団、共産党、共和国擁護派など）が暴力的な街頭闘争を繰り返していた点に着目し、この政治的暴力の実態や、そこでの各政治勢力の関係をドイツの公文書館に保存されている一次史料に基づいて実証的に分析することを目的とするものである。本研究では、1930年代初頭のベルリンおよびプロイセンにおける街頭闘争の発生状況を明らかにした上で、その原因やワイマル共和国末期の政治状況の中でそれが持っていた意味を検討した。結論として、この闘争が戦闘的な集団の抗争というだけでなく、ワイマル期のドイツ社会における「暴力の日常化」を背景とする現象であった点、さらに「政治的暴力」の視点から見ると、ワイマル共和国からナチス体制への移行は連続性の側面からも捉えることができる点を指摘した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to focus on the violent street fights in Berlin during the Weimar Republic that the various paramilitary and political forces (the Stormtroopers of the NSDAP [SA], the Stahlhelm, the communist Red Front Fighter's League [RFB], the Reichsbanner, etc.) caused repeatedly. Further, the goal is to analyse the development of this political violence and the relationships between the paramilitary and political forces empirically on the basis of primary sources that are kept in the archives in Germany. In this study I clarify the situations of the street fights in Berlin and Prussia quantitatively and concretely, and then give consideration to their causes and meanings. I conclude the following: these fights were not a mere "gang war" between the militant groups, but a phenomenon that was backed by a "normalization of violence" in the German society of the Weimar Republic. Additionally the switchover from the Weimar system to the Nazi-Regime should be interpreted from the viewpoint of "continuity" at this point.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、西洋史

キーワード：ワイマル共和国、街頭闘争、ベルリン、ナチズム

1. 研究開始当初の背景

周知の通り、ナチスは世界恐慌（1929年）以後の国会選挙で議席数を飛躍的に拡大し、1933年1月に政権を獲得した。ドイツ近現代史研究において「なぜワイマルの後にナチズムがやってきたのか」という問いかけは、そのアクチュアリティを失っていない。その際、「誰がナチスを支持したのか」というナチズムの社会的基盤に関する研究は、長らくナチズム研究の重要なテーマであり続けてきたといってよい。このテーマに関するこれまでの研究の多くは、この党が社会的中間層（商店主・手工業者・農民・官吏・サラリーマンなど）を支持基盤としていた点を強調してきた。それと同時に、ナチ党の労働者への態度を「デマゴギー」とみなすことで「労働者党」という名称のもつ意味を真剣に検討してこなかった。しかし、ナチズムの社会的基盤に関する近年の数量的・統計的研究は、ナチ党の支持基盤を従来のように中間層に限定せず、ナチ党が労働者層からも広く支持を集めた国民諸階層の結集運動であったと指摘している。労働者と聞けば「マルクス主義」をイメージし、さらにマルクス主義とナチズムの間の厳然たる敵対関係をこれに重ね合わせることで「労働者＝ナチズムの防波堤」と捉えてきた、それまでのナチズム研究の暗黙の前提は修正されつつあると言ってよい。確かに、労働者に基盤を置く社会民主党や共産党がナチ党の政権獲得に最後まで抵抗していたことは事実である。しかし、総体としての労働者「層」がナチズムと反目していたと捉え、「ナチ党＝中間層政党」とみなすことは近年の研究状況からはできないだろう。

この「ナチズムと労働者」の関係について社会史的にアプローチを試みる場合、その方法は以下の2つに大別される。すなわち、(a) 経営内での就業労働者との関係に着目し、労働組合的活動を通じたナチスの労働者獲得活動を明らかにすること、(b) 労働者地区の街頭でのプロパガンダ活動や政治的暴力への就業・失業労働者の動員を解明することである。本研究代表者は、これまで前者(a)を主たる研究テーマとしてナチスの経営内活動の解明に努めてきた。その際、まずワイマル期ナチズム運動における唯一の被用者組織であったナチス経営細胞組織(NSBO)の思想・成立過程・活動を一次史料に基づいて検討し、その研究成果を2004年に単著として公刊した。さらに2007年度からはナチス以外の右翼労働組合の実態解明にも取り組んでいる。

ところで、男女普通選挙権や社会権的自由権をドイツ国政史上初めて保障した民主的なワイマル憲法体制下のドイツ社会(ワイマル共和国)では、憲法の理念とは裏腹に、政

治的暴力闘争が街頭に溢れ、共和国末期の国内情勢はさながら内戦の様相を呈していた。ワイマル共和国後半、ナチ党の「ナチス突撃隊(SA)」、共産党の「赤色前線兵士同盟(RFB)」とその後継組織、社会民主党を中心とする共和国擁護派の「国旗団」といったように、諸政党は政治闘争組織(政党軍)を保持し、言論に基づく選挙戦と平行しながら互いに政敵への攻撃や防衛を繰り返しており、死傷者が出るまで抗争がエスカレートすることも日常茶飯事であった。注目すべきは、ベルリンではこの政治的街頭闘争が労働者地区を中心に発生していたことであり、諸政党は地区内に拠点を設け、日常的に街頭闘争を行っていた。

2. 研究の目的

以上の点を背景に、本研究はこれまでの研究をさらに発展させる形で前述の(b)のアプローチを採用し、史料の残存状況が比較的良好であるワイマル期ベルリン、とりわけその労働者居住地区を事例に政治的暴力の実態や、そこでの各政治勢力の関係を分析し、「ナチズムと労働者」の関係を解明していくことを目的とするものである。

これまでの研究ではしばしば、労働者をナチズムの防波堤とみなす上述の立場から、この政治的街頭闘争は左翼(労働者政党)の社会民主党・共産党に対して、右翼(中間層政党)のナチ党が対抗するという構図で捉えられてきた。しかし、ベルリンでの「ナチス突撃隊」はナショナリスティックなプロパガンダ、表象を駆使したシンボル闘争、暴力的な街頭闘争を通じて労働者の一部を糾合することでプロレタリア的色彩を濃くしていき、労働者とナチズムの接合点の一つとして機能していたというのが本研究の出発点をなす仮説である。本研究は、ベルリンでの政治的街頭闘争を労働者層の獲得(街頭でのヘゲモニー)をめぐるナチス、共産党、社会民主党の「三つ巴の闘い」として捉え、その上で、ナチス政権成立を挟んで最終的にナチスが街頭を制していったと想定した。

研究期間内において、本研究が明らかにしたい内容は以下の2点であった。第1に、ワイマル共和国時代のベルリンの政治的・社会的情勢、労働者地区の様子、各政党組織のプロパガンダの様子などを先行研究や当時の新聞・雑誌史料などを用いて解明し、政治的街頭闘争の背景を探ることである。第2に、ベルリンの複数の文書館に保存されている一次史料を用いて、ワイマル期ベルリンの労働者地区での政治的街頭闘争の実態を明らかにすることである。以上の2点からワイマル共和国末期にナチスが「街頭」の支配をめぐる他の政治勢力と激しく争いながら政

権獲得へ向かっていったプロセスを垣間見ること、ナチスの政権獲得の一つの説明要因を見出すことができるとというのが本研究の意図するところである。

なお、この研究を通じて、本研究代表者がこれまで取り組んできたナチズムの経営内活動に関する研究に、新たに街頭活動の研究成果が重なりあい、ナチズムと労働者の関係を解明する2つの回路（経営内と街頭）に関する社会史的アプローチが揃うことになる。

3. 研究の方法

本研究はドイツの公文書館に保管されている一次史料にアプローチし、それを積極的に取り入れることで、より実証性の高い研究を目指すものであり、2010年度より3か年にわたり、以下のような活動を行った。

【2010年度】

当該時期の諸政治勢力の政治闘争組織および政治的街頭闘争に関する国内外の研究文献を整備・講読していくとともに、8月から9月にかけて渡独し、海外調査を行った。その際には、連邦公文書館（Bundesarchiv）においてライヒ内務省関係文書、国立枢密文書館（Geheimes Staatsarchiv）でプロイセン内務省およびライヒ法務省関係文書に関する調査を行い、必要な資料を収集した。また、ベルリンの国立図書館（Staatsbibliothek）でも調査も行った。

【2011年度】

前年度に収集した史料の分析を進めるとともに、前年に引き続いてドイツでの調査を実施した。今回はベルリンの州立文書館（Landesarchiv Berlin）での調査に専念して、ベルリン警察本部およびベルリン検察庁関係文書に関する資料を収集するとともに、前年同様、国立図書館（Staatsbibliothek）での調査も行った。同時に、街頭闘争を行った組織の中でも研究が手薄な「鉄兜団」に関する研究も並行して行い、その成果を論文にまとめた。また、日本国内の研究機関に保存されている当時の政党機関紙・新聞などの公刊史料の収集にも努めた。

【2012年度】

前年度に収集した史料の分析を進めるとともに、本研究のテーマに関する総括的論文をドイツで出版された共同論文集（ドイツ語）に寄稿した。この論文には2年余りで収集した研究文献や史料の一部を取り入れたが、後者の公文書館で入手した一次史料の量が膨大且つ多岐にわたるため、研究の大半をその分析に費やすことになり、その内容を反映した研究の報告は次年度（2013年度）に持ち越さざるをえなかった。

4. 研究成果

本研究の主眼は「ナチズムと労働者」の関

係を念頭にワイマル期ベルリンの政治的街頭闘争の実態、地域レベルでの政党・政治闘争組織相互の絡み合いを社会史的に解明することに置かれた。収集した史料全体を反映した研究成果の報告は2013年度に行うため（2013年度に2度の学会報告および論文での成果報告を予定）、現段階では中間的なものにならざるを得ないが、本研究の結論を述べるならば以下の3点となる。

(1) ワイマル期ベルリンの「街頭政治」

ワイマル共和国末期には、街頭や広場での各政治勢力によるデモ行進や集会、あるいは敵対勢力への襲撃と暴力沙汰が日常的な光景として浮かび上がり、街頭は共和国や民主主義的手続き方法に対する議会外的攻撃のコミュニケーション空間、プロパガンダの公共広場として利用された。街頭を制すること、これがワイマル末期のドイツの世論形成には必要不可欠であった。「政治とはまず何よりも象徴闘争である」とすれば、街頭を制するための闘いはシンボルを用いたヘゲモニー闘争として発現する。1932年に行われた一連の選挙でのイメージ戦略を研究したG.Paulは、そこでナチ党や共産党が展開した選挙キャンペーンを「象徴の戦争（Krieg der Symbole）」と呼んでいる。その意味するところは、大衆民主主義時代の投票行動に対して街頭に溢れる象徴の果たす役割が増大したことである。換言すれば、政治的意思決定に影響を及ぼす公論（世論）を形成する「政治的公共性」の転換、つまり「街頭公共性」が「市民的公共性」に取って代わったということである。このワイマル末期の「新しい政治文化」、つまり街頭における政治的暴力やデモ行進を通じた世論形成の主役は、ナチ党と共産党であった。理性的な議会制民主主義に立脚したワイマル共和国は、「理性の府」たる議会の機能が麻痺し、その理念と対極にある政治的暴力や議会外活動が政治を左右する中で瓦解はじめていくのである。1932年の選挙戦が明らかにしたのは、共和国擁護派の社会民主党や中央党がなおも文字と言葉による政治的議論の説得力、投票用紙と理性の力に信頼を寄せていたのに対して、ナチ党や共産党は「公共圏の視覚的支配」を積極的に目指していたことである。ここに大衆集会、政党軍のプロパガンダ行進、式典、身振り、制服、旗、横断幕、ポスターなどを駆使した非言語的な視覚による政治が開花した。こうして、ワイマル末期の街頭公共性の中からナチズムの公共性＝「ファシスト的公共性」の誕生を見るのである。

(2) 街頭闘争の実態

1926年11月にナチスのベルリン大管区長にゲッベルスが就任し、市内の労働者地区への侵入を試みて以降、ベルリンでは諸政治勢力間の政治的暴力（特にナチスと共産党）が

横行するようになったが、とりわけナチスによる政権掌握の前年である 1932 年のドイツにおいて政治的暴力は「内戦」とも呼ぶうほどエスカレートした。枢密国立文書館およびベルリン州立文書館所蔵の史料には、この時の街頭闘争の量的な把握を可能にするデータが（完全ではないが）残されている。本研究代表者が入手した史料の一部を引用してみると、各政党・政治団体の集会への政敵による妨害で発生した乱闘に警察が介入した事例はベルリンを含むプロイセン地域では 1928 年の 318 件から 579 件（1929）、2494 件（1930）、2904 件（1931）、5296 件（1932）と急増し、同じくプロイセンでは 1932 年に 170 名以上が政治的暴力で落命している。銃や刀剣類など市民社会には武器が広がり、1931 年のベルリンでは 600 丁以上の銃や 1200 点近い刀剣類、さらに 80 発の手榴弾までもが警察により押収されている。ベルリン警察本部の日々の報告には毎夜発生する政治的乱闘や襲撃事件が記録されており 1932 年 6 月 21 日から同年 9 月 5 日までの記録（77 日間）に目を通せば、記録の残っていない 10 日間を除いて、政治的暴力事件のない夜はわずか 3 日間のみであった。こうした状況に対して、政府は手をこまねいたわけではなかった。ブリューニング内閣の下では大統領緊急令の形で政治的暴力を抑え込むための措置（集会・行進の届け出義務化、公共空間での制服・徽章直用の禁止、武器所有の制限）が何度となく下され、1932 年 4 月にはナチス突撃隊・親衛隊などが強制的に解散された。しかし、続くパーペン内閣でこれらの施策は廃止され、1932 年 7 月の国会選挙を前に政治的暴力はピークを迎えることになった。

(3) 街頭闘争の意味

これほどの激しい闘争が発生したのは、ベルリンでは主として労働者地区もしくはブルジョア地区内のプロレタリア的色彩の強い地域であった。この闘争を「資本家の手先」あるいは「反マルクス主義の戦闘的中間層の集団」としてのナチスが社会主義労働者ミリューを制圧したという構図、つまり階級闘争として理解してはならない。むしろ、ナチ党、共産党、社会民主党という労働者志向の三党が展開した三つ巴の闘いと捉えるべきである。1930 年代初頭には、この三党だけが政党（党员・投票者としての労働者）、経営内組織（経営内労働者）、街頭組織（街頭の労働者・失業者）という 3 つの次元での労働者獲得を目指す組織構造を構築していたのである。この点で、ナチ党は労働者獲得を強く志向した唯一の非マルクス主義政党であり、運動であったといえる。

その際に重要なのは、敵の殺傷にまで至る暴力の行使が労働者地区では決して否定・忌避されず、SA だけでなく共産党側からの襲

撃も頻発していたように、むしろそれが許容される風土が地区全体に醸成されていた点である。共和国初期の政治的暴力が元兵士や義勇軍を中心とした限定的なものであったとすれば、1924 年以降のワイマル共和国における政治的暴力は一般市民が担う非革命的で非体制転覆的な「小競り合い（Kleinkrieg）」

（D.Schumann）であった。暴力は小規模化する代わりに、市民社会に広く浸透して頻発化した。つまり、理性的な議会制民主主義に解消しきれない「政治的暴力のサブカルチャー」（M.L.Ehls）がワイマル末期のドイツ社会にある程度浸透していた（社会ミリタリズム [E.Rosenhaft]）がゆえに、多くの人（特に若者）が SA のような暴力的街頭組織に魅力を感じたのではないだろうか。政治的暴力が横行していた 1932 年の選挙（大統領・国会・プロイセン邦議会）でこの暴力の主たる担い手たるナチスと共産党が得票を伸ばしたこと、特にナチスには 1932 年 7 月の国会選挙で 1300 万人以上が票を投じたという事実はこれまで以上に重視されるべきである。

この「政治的暴力の市民化・日常化」こそがワイマル共和国末期とナチズム体制初期を結び付ける一つのファクターであり、この意味で「ワイマルからナチズムへ」の政治的転換は連続性の観点からも捉えることが可能になるのである。政治的敵対者を暴力をもって制圧しようとするこの風潮の延長線上にナチズム期の街頭暴力を重ねることは間違いではないだろう。ナチスが街頭公共圏を制する、つまり政治的左翼を街頭から駆逐するのは政権獲得以後まで待たなければならなかったが、ワイマル末期にその端緒を求めることは可能であろう。

本研究の特色をあらためて指摘するとすれば、次の 2 点となるであろう。

(1) わが国のナチズム研究で意外にもこれまであまり研究されてこなかったワイマル共和国後期の政治的暴力に着目し、特にベルリンを対象としてその実態を数量的かつ具体的に把握した上で原因や意味を考察し、政治的街頭闘争とナチズムの台頭との接点を明らかにしようとした。

(2) このテーマに関して比較的研究が盛んな英米圏やドイツでの最新研究を収集してその成果を吸収すると同時に、ドイツの公文書館に保存されている内務省・検察庁・警察などの膨大な報告書を渉猟し、それを積極的に用いることで、より実証性の高い研究を目指した。

これまでワイマル共和国後期（＝ナチス台頭期）の政治は国会の機能不全（大統領緊急令統治）という民主主義の欠陥や世界恐慌の経済的影響、あるいはヴェルサイユ条約への反発などの外交的問題を主たるテーマとして研究されてきた。確かに、それらはナチス

が共和国後半の選挙で躍進できた原因の一端を明らかにしていた。しかし、共和国の民主的な政治の崩壊はドイツ社会の非民主的側面（話し合いや妥協ではなく、暴力による紛争解決）と表裏一体となって進行していたのであり、この意味では政治的暴力の問題を共和国の初期段階に限定し、ナチス台頭期のドイツ社会における「(政治的)暴力の受容」というテーマをこれまで捨象ないし軽視してきたワイマル共和国史研究は再考されるべきであろう。繰り返して言えば、政治的暴力の問題は共和国存続の間、常に付きまとっていたのであり、市民社会と暴力が接近し、国家による暴力の独占がその限界を露呈したことで、共和国の政治や社会は不安定化した。この点において、「政治的暴力」や「政治的街頭闘争」の問題はワイマル共和国の崩壊とナチズムの台頭を考える重要なテーマになりうるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①原田昌博、ワイマル期鉄兜団の労働者政策—鉄兜団自助会(Stas)の成立と展開—、史学研究、査読有、275号、2012、1-24。
- ②原田昌博、1920年代後半における鉄兜団の政治的急進化と「労働者問題」、鳴門教育大学研究紀要、査読無、27号、2012、246-260。

[図書] (計1件)

- ①Harada, Masahiro, *Nationalsozialismus, Arbeiterschaft und Straßenkampf in Berlin während der Weimarer Republik*, in: Hardach, Karl (Hrsg.), *Internationale Studien zur Geschichte von Wirtschaft und Gesellschaft*, Frankfurt a.M. (Peter Lang), 2012, S.265-286.

6. 研究組織

(1)研究代表者

原田 昌博 (HARADA MASAHIRO)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：60320032

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし